

浦賀文化

令和4年(2022年)7月1日

第70号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

蹄の井の伝説

馬堀インターから防衛大学校へ向かう坂の途中にある浄林寺。その境内の片隅に、かつて馬頭観音が祀られていた白亜のお堂がある。傍らの岩場からは、季節を問わず清水が湧き続けているという。



名馬 池月(浄林寺)

古代から近世にかけて、馬は人や物資を運ぶ動物として、日常生活に密接な関係がありました。馬に対する労いと感謝を込めて、全国各地に馬頭観音が建てられました。馬頭観音とは、その名のとおり、頭上に馬の頭部を乗せた観音像で、今でも沿道に見かけることがあります。

「馬堀蹄の井」という、名馬池月にちなむ伝説をご紹介します。この伝説は、文化九年(一八一二年)、西浦賀の篤学者・加藤山寿が著した『三浦古尋録』に記されています。

◇ ◇ ◇

今をさかのぼること八百三十年ほど昔、元暦年間(一一八四年)のころ、房総峰岡(現在の千葉県鴨川市江見)の洞窟に、「荒潮」と呼ばれる一頭の暴れ馬が住み着いていました。この馬は、田や畑に入り込んで作物を食い荒らすことから、村の厄介ものになっていたのです。困り果てた村人たちは、ある時、この馬を退治することになりました。村人たちに追われた馬は逃げ回り、ついには、浦賀水道を渡り、対岸の走水松崎まで泳ぎつき、小原台の森(今の防衛大学校のあるあたり。木々の生い茂った小高い台地になっていた)に逃げ込みました。しばらくの間、マグサを食べて過ごしていましたが、飲み水もなく疲れも重なり倒れてしまいました。すると、馬の夢枕に馬頭観音が現れます。観音様に促され、坂道のかたわらにあった岩を蹄で穿つてみると、岩の間からこんこんと清水が湧きだしました。暴れ馬がこの霊水を飲んで渴きを癒すと、たちまち性質

がおとなしくなり、毛並みの美しい駿馬に変わったといわれます。これが「馬堀」という地名の由来といわれています。村人たちは、小原台に遊ぶこの美しい雌馬に「美女鹿毛」と名付けて可愛がっていました。この馬の評判は、近隣はもとより遠方にも広まりました。と同時に、この不思議な霊水を求めて多くの人が馬堀にやってきたといえます。後世になり、馬堀の浄林寺境内の一角に馬頭観音堂が建てられ、「蹄の井」にちなむ伝説を伝えていきます。

やがて、「美女鹿毛」は、村人たちにより、衣笠城を治めていた三浦義澄に献上されました。(三浦義澄は三浦大介義明の次男でしたが、兄・杉本吉宗が房州で長狭氏との戦闘で亡くなったため、義明の後継者となりました。)「美女鹿毛」に試乗した義澄は、すばらしい名馬と褒めたため、大事に育てていました。のちに、この馬は源頼朝に献上されることとなります。命をうけた和田義盛の甥である荏柄胤長は、この馬を難なく乗りこなして山坂を下り、浜辺から海を泳がせ金沢六浦へ至り、陸路、鎌倉へ届けました。頼朝は、太

くたくましく、生きたものは馬でも人でもよく啜(く)いついたことから「生啜(いけづき)」「池月」と名づけました。

その後、寿永三年(一一八四年)、平氏を討伐するために西国にいた源義仲(木曾義仲)と、頼朝から派遣された範頼・義経連合軍との戦い「宇治川の合戦」が行われました。この合戦に際し、佐々木四郎高綱は、頼朝に望んで「池月」をもらい受けています。同じく頼朝より「磨墨」を与えられた梶原源太景季と「宇治川の先陣争い」を繰り広げます。その先陣争いに勝利した佐々木四郎高綱の勇姿は、名馬「池月」とともに『平家物語』に語られ、その後も、絵巻物や浮世絵の武者絵にも登場し、後世に多く語り継がれています。

(芳賀 久雄)

※10年間にわたりご執筆いただきました芳賀久雄さんは、今号で最終回となります。長い間ありがとうございました。

★参考資料

- ・三浦古尋録 加藤 山寿著
- ・おおつの史跡道 大津地域文化振興懇話会
- ・三浦半島の史跡と伝説 松浦 豊著 暁印書館
- ・三浦大介義明とその一族 三浦大介義明公八百年祭実行委員
- ・横須賀こども風土記(中巻) 田辺 悟著 横須賀市民文化財団



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その二十

郷土史家 山本 詔一



●軍艦修理始まる●

ペリー来航を契機に軍艦の必要性を強く感じた幕府は、浦賀奉行所に軍艦建造を命じた。こうして日本で最初の洋式軍艦・鳳凰丸が誕生したが、これに伴って洋式海軍創設にも動き出すこととなった。浦賀奉行を勤めたのちに長崎奉行になっていた水野忠徳を通じて、オランダ政府へ軍艦を発注すると、オランダからフ

佐々倉桐太郎、同心からは土屋忠次郎・浜口興右衛門・飯田敬之助・春山弁蔵・山本金次郎・金沢種米之助・岩田平作が一期生として選出された。その後、二期生に岡田井蔵、三期生に合原操蔵・朝夷捷次郎ら与力と同心の柴田真一郎が派遣された。

伝習が始まるとオランダ国王から蒸気船「スピン」が寄贈され、これを「観光丸」と改称して使用した。一期生の伝習が終了した安政四年（一八五七年）三月、伝習所初代総督であった永井尚志や佐々倉桐太郎ら日本人の手によって、オランダ教官の力を借りることなく「観光丸」を

江戸へ回航した。「観光丸」の江戸回航には、江戸築地に総合的な武芸養成機関であった講武所内に『軍艦操練所』を開設する意図があった。この年の閏五月に軍艦操練所が開設されると、浦賀奉行所から佐々倉桐太郎をはじめ浜口興右衛門・岩田平作・山本金次郎・土屋忠次郎ら五名が教授方に任命された。操練所の教授方は全員で八名であったので、その半数以上が浦賀奉行所からのメンバーで占められていたことになり、いかに優秀な人材が揃っていたのかを物語っている。この時点で、中島三郎助や春山弁蔵・飯田敬之助は長崎に残り、さらなる伝習をしていた。

八月になると、二次教育の指導教官となるカッテンディーケが、幕府がオランダに注文していた蒸気船「ヤパン」に乗り長崎に来航した。蒸気船「ヤパン」を、日本名「咸臨丸」と改めた。

長崎に残った中島は、この「咸臨丸」で五島や天草へ航海実習に出ている。さらに中島のノートには、カステラや朝鮮餡の製法から喘息やコレラの治療薬のこと、人工硝石の製法まで記されており、好奇心のかたまりのような中島像がみえてくる。

この「観光丸」「咸臨丸」に、やはりオランダに注文していた「朝陽丸」が加わり、江戸築地の軍艦操練所は海軍教育の中心となった。それに伴って軍艦修理もはじまり、その修理の場所が築地新町の中堀（現在の浦賀港）となった。

俳句の散歩道

断食のみそぎの井戸や落椿
菊池 美紀子

天草干す真向く鋸山晴るる
鈴木 ひろ

笑話一題

長寿の心得
人生は六十から七十才でお迎えの来た時は何の事じや留守と云え八十才でお迎えの来た時はまだまだ早いと云え九十才でお迎えの来た時はそう急がずともよいと云え百才でお迎えの来た時は頃を見てこちらからボツボツ行くと云え

作者やいつ頃作られた心得なのかはわかりません。私は、人生六十才からの年に生死を彷徨う大病をしました。若い時はあまり関心が無かったのですが、病気をきっかけに、改めて「長寿の心得」について考えるようになりました。今や人生百年時代、忙しくて諦めていた事や健康についてポジティブに考え直して、私なりの「長寿の心得」が描けるよう、ライフチェンジをしたいと思います。

ふなつきー

分館よりお知らせ

長い間ご不便をおかけしましたが、自動扉の修繕工事が完了いたしました。今後も浦賀コミセン分館をご利用ください。

